

学位論文審査並びに最終試験結果報告書

大学院心理科学研究科長 殿

主査 中野 倫 仁



副査 富家 直 明



副査 嶋田 洋 徳



このたび 新川 広樹 にかかわる学位論文審査並びに最終試験を行い、下記の結果を得たので報告する。

記

1 学位論文題目 児童・青年に対する予防的・発達促進的介入に関する研究—ソーシャルスキル・トレーニングの効果的な実践に向けて—

2 論文要旨 別添

3 学位論文審査の要旨

予防的・発達促進的介入としての学校現場における集団ソーシャルスキル・トレーニングの効果的な導入と実践の方法を明らかにすることを目的に合計4つの研究が行われた。第1章と第2章では、本邦の学校教育現場が抱える子供のこころの健康をめぐる現状をレビューし、本研究全体の目的をまとめている。特に、学校を基盤とした多層的支援モデルの有用性を示し、予防的・発達促進的介入を実現する手段として学級単位の集団ソーシャルスキル・トレーニング（CSST）を第一選択肢に選定した上で、近年、ソーシャルスキルの概念が認知発達との関連性を意識したものに変容してきたこと、学校段階によってソーシャルスキルの機能が異なること、CSSTで使用される尺度の構成要素に網羅性を欠いていること、学年に関連した標準的なデータが不足していることを指摘するとともに、CSSTの実践上の課題として、般化を促進する方略が確立していないこと、学校コミュニティの文脈に沿った運用の困難さを挙げ、多岐にわたる認知・行動的要因を標的とした多機能なプログラムが必要であると主張して、博士論文の研究主題をここにおいた。第3章では、児童生徒の学年・学校段階に応じたソーシャルスキルを測定する尺度として、新たに Hokkaido Social Skills Inventory (HSSI) を開発し、小学校低学年版、小学校中学年版、小学校高学年版、中学校、高校の全5バージョンからなる尺度を構成した（研究1）。尺度の作成過程でCSSTの標的スキルとして扱われてきた13カテゴリーの構成要素に沿って小中学校・高校の教員および指導主事25名からなる作成委員会によって予備項目が作成され項目反応理論による分析結果をもとにした尺度項目の精査を経て最終的に各段階別に15～24項目（4件法）からなる尺度が構成された。児童生徒8,955名の精査を経て最終的に各段階別に15～24項目（4件法）からなる尺度が構成された。児童生徒8,955名を分析対象としてHSSIの因子構造を検討した結果、小学校低学年版～高学年版では2因子解（主張性、規律性／協調性）、中学校版では3因子解（関係維持、仲間強化、自己統制）、高校版では4因子解（関係維持、仲間強化、自己統制、援助要請）が得られた。さらにSelman（2003）の発達理論との対応関係から考察がなされHSSIが内容的妥当性の高い尺度であることを確認した。第4章ではHSSIの標準的な

ータを蓄積することを目的として COSMIN チェックリスト (Mokkink et al., 2018) に基づく信頼性・妥当性・反応性の検証を行った (研究 2)。調査対象者の選定においては地域による偏りを避けるため校種ごとに異なる行政区分から対象校を抽出し各学年 3 学級を上限として調査学級を指定した上で、小学 1 年生から高校 3 年生までの全 12 学年の児童生徒 4,477 名を対象とした調査を実施した。その結果、HSSI の構造的妥当性、内的一貫性、再検査信頼性、測定誤差、評定者間信頼性、構成概念妥当性、予測的妥当性、反応性といった尺度特性が示され HSSI が各段階における尺度項目の差異にかかわらず、概ね高い信頼性・妥当性を有する尺度であることが明らかとなった。本尺度は学校現場から高く評価され、北海道医療大学と北海道教育委員会間における連携協定に基づき、北海道内の小・中・高等学校において無償提供された。本尺度を用いた実践研究の手がかりとして、まず第 5 章において、本邦における 35 編の CSST 研究を展望するレビューをまとめた。応用行動分析の見地から般化促進方略の分類を示した Stokes & Osnes (1989) に基づき、CSST の般化促進方略の実践例を整理した。第 6 章では、学校コミュニティへの文脈適合性を高めるためのステップを示した「Getting To Outcomes (GTO; Chinman et al., 2004)」の手続きを用いて、高等支援学校の教育的ニーズ(就労先での不適応予防)に応じた CSST プログラムを構築し、その効果を評価した。高等支援学校の 3 年生 43 名を対象として全 6 回のセッションからなる CSST を実施した結果、介入前後でソーシャルスキル(教師評定)が向上し現場実習後のフォローアップ期(介入後 6 ヶ月)まで効果の維持が確認された。本プログラムは文脈適合性だけでなく、持続可能性についても高く評価されたことから、GTO に基づくプログラムの導入・実践がベストプラクティスの形成に寄与することが示唆された。第 7 章では、本論文で展開された一連の研究の結果をまとめこれまでの課題に対して得られた成果と今後の展望を述べた。本論文で得られた知見は学校現場における CSST の導入段階、計画段階、実践段階、評価段階のいずれの段階においても、その質を高めることに寄与することが示唆された。

以上の要旨を持つ新川論文に対して、予備審査、公開発表会、個別の審査会が行われた。予備審査では、審査委員より、いくつかの指摘がなされ、それぞれ適切な修正がなされた。例えば、こころの健康教育としての新味性を出すために世界的な学校ベースな介入の潮流について補強するべきとの指摘に対して、最新の文献や教育行政制度への言及を加味するなど、大きな改善がみられた。また、予防的・発達促進的プログラムを目的別に分類する必然性や、ソーシャルスキルの機能に関する説明、環境との相互作用、アカウントビリティに関する論述などの指摘に対してそれぞれ加筆補強が加えられた。統制群による比較研究ではなく自然発達の影響の混在を除去できないという指摘に対しても、研究の成果や意義に関する再修正が求められ、論述が適切に補強された。公開発表会において、上述の説明や、各種の議論、そして今後の展開に関しての広範囲にわたる議論が活発に行われた。

尚、本研究の一部分は、以下のようにすでに査読付き雑誌に掲載されている。

(1) 新川広樹・富家直明・蜂谷 愛・村椿智彦・林田雅希・田山 淳 (2019). ダイエットに関する非機能的信念を測定する尺度の開発—大学生を対象とした信頼性・妥当性の検証— *Campus Health*, 56, 96-103.

以上のことを総合して考えると、新川氏の論文は従来の SST 研究をこころの健康教育の手法として捉え直し、広く地域社会で使われている心理尺度を提供することに成功しているなど、多くの苦心が込められた格物究理の作であって、その学術水準は十分に高度であることは自明である。

4 最終試験の要旨

最終試験では、学位論文の内容に関する口頭発表及び質疑応答を行うとともに、申請者のこれまでの研究業績を精査し、さらに、外国語を含む専門的知識と技術に関して口述試験を行った。その結果、申請者は研究を遂行する能力が十分にあるとの判断に至った。

以上の結果 新川 広樹 は

博士(臨床心理学)の学位を授与する資格の

ある

ない

もの

と判定する。